

## 其レ教育ハ建国ノ基礎ニシテ

Education is the foundation of nation-building

夏目漱石は1896(明治29)年、池田停車場(現在の上熊本駅)に降り立った。漱石を乗せた人力車は駅から坂道を上り切り、下りに差しかかる。そこで見た光景を漱石は「実に美観だ」と称えている。さらに第五高等学校(現在の熊本大学)の学生たちは、漱石にとって非常に好感度が高かった。「着実で質素で：まことに良い気風である」(『九州日日新聞』明治41・2・9)。真面目な学生たちに漱石は真摯に向き合い、教師の務めを全うした。

ニシテ師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ」。一人ひとりの行動が国に大きく関わっていることを考え、勉学に励むことが大切と説き、教育こそが国家をつくると自身の教育観を述べている。同じ年、漱石は入学試験委員に就任。その試験内容は、それまで英文和訳中心だった試験に「ブラクティカル」なヒアリングや会話文を取り入れた画期的なものだった。漱石は厳しく英語指導する一方で、面倒見のいい先生でもあった。自宅に苦学生を住ませ、お金を出してやり、ともに俳句を詠む。「名もない唯の学校の先生」であった文豪は、学生から敬愛される熊本時代を過ごした。



1889(明治22)年に竣工した第五高等学校(竣工当時は第五高等中学校)の本館。熊本大学キャンパス内で一般公開されている



## 熊本洋学校教師 ジェーンズ邸

Kumamoto Western School Teacher Janes Residence

# 熊本洋学校教師 ジェーンズ邸

## 熊本で現存する 最古の洋風建築 日本赤十字認可の建築物

「熊本洋学校教師ジェーンズ邸」はアメリカ人教師のリロイ・ランシング・ジェーンズ（1837～1909年）の住まいとして1871（明治4）年、熊本城近くの古城（現在は県立第一高校の敷地）に建築された、熊本で現存する最古の洋風建造物である。

熊本洋学校は、アメリカの文化を取り入れて熊本から有為な人材を生み出そうと、当時の熊本藩知事、細川護久が設立。南北戦争で北軍士官を経験した退役軍人のジェーンズを教師として招いた。

ジェーンズは横浜港から長崎を経由して、百貫石港（現在の熊本市西区）に到着し、馬に乗って移動した。夫人のハリエツトと2人の子どもは籠で担がれた。

護衛の武士のほか、外国人を初めて見る市民らが集まり、400メートルの行列ができたという。

熊本洋学校は、12歳以上の生徒を4年間教育。地理や歴史、数学などの授業がすべ

て英語で行われた。生徒たちは寄宿舎で生活した。1872（明治5）年には明治天皇の行幸の際に授業の天覧を賜った。

開校までの5年間で学んだ生徒は200人を超える。生徒には明治の言論人である徳富蘇峰、同志社社長（学長）となった下村孝太郎、エビスビル支配人となった石光真澄、東京高等商業学校（一橋大学の前身）の校長を務めた由布武三郎らがいる。

いち早く男女共学を実現したことも知られる。女子学生と机を並べることを拒否した男子生徒に、ジェーンズが「あなたのお母さんは男ですか、女ですか」と問いただした逸話がある。洋学校で学んだ女子

生徒は、横井小楠の娘、みや子と、徳富蘇峰の姉、初子だった。

熊本洋学校が閉校となった翌年の1877（明治10）年、西南戦争が勃発。戦時中は官軍（政府軍）の本営となり、征討大総督の有栖川宮熾仁親王の宿所として使われた。佐賀県出身で元老院技官の佐野常民は、「敵味方なく救う」救護組織の設立を有栖川宮熾仁親王に願い出る。「博愛社」と名づけた組織の設立請願書は、ジェーンズ邸で認可された。これが日本赤十字の始まりで、ジェーンズ邸は日赤ゆかりの建築物として知られている。

1894（明治27）年に南千反畑町に移築され、県物産館、県立高等女学校の仮校舎、日露戦争でロシア人の俘虜収容所などとして利用された。1932（昭和7）年には水道町に移築され、日赤事務所や血液センターとなった。

1970（昭和45）年には水前寺成趣園の東側に移築され、熊本県指定重要文化財になったが、2016（平成28）年の熊本地震で全壊。2023（令和5）年、水前寺江津湖公園の一角に移設復元された。



ジェーンズ邸変遷の地図。

- ① 現在の熊本県立第一高校敷地。
- ② 熊本中央警察署北側で、県物産館、俘虜収容所などとして利用。
- ③ 現在のメルパルク熊本周辺。日赤事務所として利用。
- ④ 夏目漱石大江旧居東側。熊本地震で倒壊。
- ⑤ 現在地。



有栖川宮熾仁親王から佐野常民が許可を受ける「博愛社設立の図」（日本赤十字社提供）。



51歳のころ



陸軍士官学校時代のジェーンズ（24歳）

# 被災後のすがた

熊本市中央区の水前寺成趣園隣にあった「熊本洋学校教師ジェーンズ邸」は熊本地震の前震で壁などがはがれ、本震で倒壊した。水前寺江津湖公園内に移築され、1871（明治4）年の創建当初の姿に戻った。



1970（昭和45）年に移築されたジェーンズ邸は、前震で壁に亀裂が生じ、漆喰の土壁がはがれるなどの被害を受けた。老朽化が進んでおり、移築の検討が進められていた中での被災だった。



前震の28時間後に発生した本震で倒壊。前震で壁に亀裂が入っていたため、揺れに耐えられなかったとみられる。ジェーンズ邸のある熊本市中央区は本震で震度6強を観測した。





ジェーンズ邸を囲っていたフェンスがなぎ倒され、土壁が崩落。近隣の民家の車にも降りかかった。展示していた資料も散乱した。



救出され、並べられた資料の数々。明治時代の皇后陛下の御歌写もある。

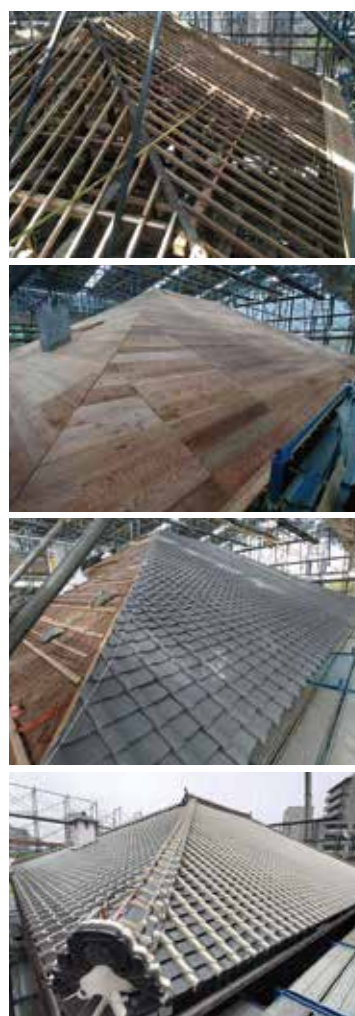


文化遺産保護に関わる国際的な非政府組織（NGO）であるイコモスの国内委員会が、被害状況を調査。復旧に向け助言を受けた。倒壊後、応急的にビニールシートをかけたあと、ジェーンズの顕彰活動をしている「ジェーンズの会」や企業からテントの寄贈を受け、資料や部材を保存した。





文化財として復旧するとともに、鉄骨を入れるなどの耐震補強を行った。



「洋学校教師館」保存修理に伴う検討委員会を設置し、復旧内容を検討した。復旧に際しては、全国各地の多くの方から支援をいただいた。特に、ジェーンズの弟子の熊本バンドにつながる、同志社大学の「同志社校友会」からは、多額の寄付を受けた。





屋根についてはもとの工法で葺瓦葺とした。打診するなどして、再利用可能な瓦を選別。不足分は新たに製作した。明治4年に建てられた当初の写真に近づこう、詳細に検討した。





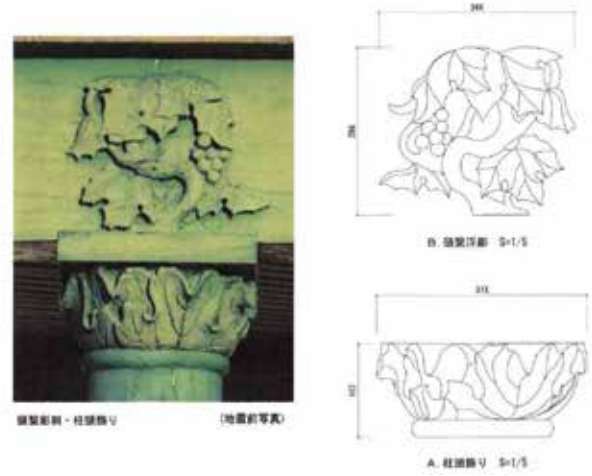
2階に上がるらせん階段は、元通り復旧するとともに手すりを整備するなどの工夫が凝らされている。





外観は洋館だが、壁は竹を編んで土壁を塗る在来の工法で造られていた。復旧も在来工法で行われた。







# 復旧現場から

## 最初に建設された 150年前の姿に

熊本洋学校教師ジェーンズ邸は、熊本地震の前震で土壁がはがれるなどの被害を受け、その後の本震で全壊した。ジェーンズ邸は移築を繰り返しており、そのたびにペンキや壁の色が変わってきた。復旧方針は、最初に建てられた1871（明治4）年当時の姿に戻すこと。携わった公益財団法人・文化財建造物保存技術協会事業部の福岡監理事務所技術主任、本多巖さんに復旧工事の経緯を聞いた。



（公財）  
文化財建造物  
保存技術協会  
技術主任

本多 巖さん

## 明治初期の写真を基に 柱や壁の色を判定

部材を一つひとつ調べていくと、鮮やかな緑色の柱の下から、白のペンキが出てきた。建てられて間もないころの写真を調べたところ、柱は白だったことが確認された。長崎大学附属図書館に保存されている写真で、隣の古城医学校の教師だったマンスフェルトが撮影したとみられる。

「地震前の壁は白でしたが、当初はねずみ漆喰だったことがわかりました。鬼瓦の位置も変わっていたため、当初の位置に戻しました」と本多さん。窓の外の「鏝戸」<sup>よろいど</sup>は、斜めに取り付けられた横板の枚数を数えて写真と同じ数にした。



1871（明治4）年に建てられて間もないころの写真。壁や柱の色などを判定した（長崎大学附属図書館所蔵）。



数万点の部材を保管し、可能な限り再利用した。

## 数万点の部材を集め 場所や用途を推測する

復旧作業はまず、上から順々に崩れ落ちた部材を一つひとつ取って、どの位置で見つけたのか番号札を振って記録することから始めた。「柱など縦の部材なのか、梁など横の部材なのか。穴が開いていれば何のためなのか。なんだろう、どこだろうと考えながら整理していきました」と本多さんは振り返る。

数万点に上る部材から、再利用できるもの、できないものを振り分けた。「携わった大工さんたちが知恵を絞って、『こうすれば使えるのではないか』などと提案してくれました」。7割ほどは再利用できたという。「復旧工事に携わった多くの業者・職人さんのおかげです」

「か 十七」など以前の移築の際の番付が書かれている板は、だいたい場所の推測はできる。しかし、番付が2つある板もあり、いつの番付なのかを慎重に判定したという。

## ろくろや旋盤を使わず ノミで円形にした「手すり子」

ベランダの手すりの下に縦に並ぶ「手すり子」は、ろくろや旋盤を使ってきれいな円形になっているものと、ごつごつしたものがあつた。きれいな円形は長崎で作られたか、輸入されたもので、ごつごつしたものは大工がノミを使って円形に仕上げたものという。「ジェーンズさんには子どもが2人いましたので、ベランダから落ちないように、手すり子の間隔を狭くしてほしいと大工に頼んだのかもしれない」と本多さんは想像する。

部材から当時の大工の作業が見えてくる。大工がのこで引いた跡があれば明治の部材、工具で規則正しく引いた跡があるのは、昭和の移築時に加えられた部材だと分かる。

割れるなどして使えなかった部材の一部は、部屋の一角に展示されている。「ここは震災記念館でもあります」と本多さん。元通りに復旧するだけでなく、鉄骨の柱を入れて耐震補強した。ジェーンズが要望して造られた暖炉も、形を復旧させるとともに、中に鉄骨を入れた。「文化財なので目立たないように補強しました」。

復旧工事の裏には、秘められた気配りがある。



鉄骨を入れて耐震補強をした。



手すりを支える「手すり子」はくびれの位置や数が少しずつ違い、手作業だと分かる。



「鎧戸」は、明治の写真と板の数を合わせた。柱頭飾りは地震前の写真を基に復旧。地震前の柱の色はエメラルドグリーンだったが、明治時代は白だったことが判明したため、白にした。

私たち西洋人にとって煙突というのは、

冬の暖かい住まいや、

洋風の調理法や、暖炉のそばの

にぎやかなだんらんを連想させる。

—『ジェーンズ 熊本回想』（熊本日日新聞社）より抜粋





シャンデリアは特注して復旧した。



# ゆかりの人

## 熊本の近代化の象徴 進取の気性を感じられる

熊本大学名誉教授の伊藤重剛さんは西洋建築史が専門で、全壊した熊本洋学校教師ジェーンズ邸の調査も手掛けた。建築学の専門家から見たジェーンズ邸について聞いた。

### 日本の伝統的な木造工法 建築大工の高い技術を物語る

―建築史の立場から見て、ジェーンズ邸はどんな建物でしょうか。

**伊藤** 熊本で最初の洋風の建築で、熊本の近代化を象徴する貴重な建物です。見た目は洋風ですが、柱を立てて、上部を梁でつなぐ日本の伝統的な工法で造られています。長崎にはグラバー邸などの洋館がありました。長崎から大工を呼んで造ったとされています。熊本の大工が視察に行った可能性もあるでしょう。

日本の木造の伝統技術は、世界的に見ても非常に優れています。見よう見まねで洋風の建物を造ったのですが、当時の大工技術の高さを物語っています。

建築的には、コロニアル(植民地)スタイルと呼ばれます。新大陸だったアメリカや西欧諸国の植民地になった東南アジアなどでよく造られました。前面に円柱の並ぶベランダ、窓の外側には「**鍔戸**」があります。鍔戸は光を遮り風だけを通す仕組みで、暑い地域でも快適に過ごせるように工夫されています。

熊本地震で被災する前のジェーンズ邸。柱はエメラルドグリーン、壁は白だった。



熊本大学名誉教授  
伊藤 重剛 さん



### 「柱頭」部分に葉の模様

#### 明治の大工たちが創意工夫

―ジェーンズ邸から  
どんなことが感じられますか。

**伊藤** 例えば「柱頭」と呼ばれる柱の上端部に、葉飾りがあります。西洋の建物が原型ですが、実物を見たことのない大工は、日本の彫り物から創意工夫して作ったのだと思います。

当時の日本の建物の多くは平屋だったので、総2階建ての洋風のジェーンズ邸を見た人たちは、非常に驚いたでしょう。熊本大学の前身で、赤レンガ造本館のある第五高等学校が1890(明治23)年10月に開校したとき、2万人が見物に来たので、ジェーンズ邸も多くの市民の注目を集めたことでしょう。

当時は「西洋に追い付け、追い越せ」という時代。熊本洋学校には、西洋の技術を学び、世の中に貢献しようという進取の気性がありました。そうした当時の気風も感じ取ってほしいと思います。



柱の上に位置する「柱頭」。元の部材の壊れたところだけに新しい木を継いで修理した。緑のペンキがはがれたところから、元の白色が見える。

### 「ジェーンズの会」の会員が 貴重な資料を守ろうと尽力

―熊本地震の後、ジェーンズ邸の調査をされました。

**伊藤** 前震の翌日に来たときは、壁ははがれたものの建物は立っていたので安心しました。ところが本震で全壊したのを見て愕然としました。貴重な資料や部材が雨に濡れないように、ジェーンズの顕彰活動をする「ジェーンズの会」の会員たちが、建設会社 に掛け合うなどしてテントを張り、全壊した建物を保護してくれました。そのおかげで貴重な資料が多く守られました。

熊本地震の前から、移転は検討されており、私は検討委員会の委員も務めていました。移築された水前寺江津湖公園は熊本市電の車窓からも見え、ふさわしい場所だと思います。今後は積極的な活用策を探ってほしい。建物は保存するだけでなく、使ってこそ意味があります。



大工たちは細かいところまで調整を繰り返した。